

## ■ 論文 ■

紙上「身の上相談」における回答の言語編成  
－専門性によらない回答実践を中心に－

矢崎 千華

(関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程)

■ 要 旨 ■ 本稿は、紙上で行われる「身の上相談」の中でもっとも歴史があり、現在も継続中である『読売新聞』『人生案内』の回答の言語編成を分析・考察するものである。現在目にするような紙上「身の上相談」の原型は、明治後期頃に成立した。当時の回答者は新聞記者であったが、現在では、弁護士や精神科医といった専門家や作家などの著名人によって担当されている。年間300件ほど掲載されているが、その半数近くが作家によって回答されている。このように多くの場合作家により回答が行われているという事実から、本稿では、特定の専門的知識を用いずに回答を成り立たせている特徴的な言語編成があると仮定し、その言語編成を明らかにした。専門性によらない特徴的な言語編成として、①相談者の訴える問題を再確認する（問題化）、②相談者の訴えを肯定する、③回答の中に回答者自身（「私」）が登場する、という3つが明らかとなった。相談者の訴えを肯定しつつ問題の所在を明らかとし、相談者と共同性を生成することにより、最終的な解決策の提案の正当性が論理的正しさをもつものとして形成されていくのである。

■ キーワード ■ 「身の上相談」、回答、提案、言語編成

## 1. はじめに

紙上「身の上相談」とは、新聞や雑誌などに一般の人びとが悩みを投稿し、その紙上において専門家や知識人に回答してもらうものを指す。この紙上「身の上相談」は明治中頃からはじまるもので、現在でも紙上におけるひとつのジャンルとして継続されている。

紙上「身の上相談」でもっとも歴史があり、1914（大正3）年にはじまり現在でも連載されているのが『読売新聞』の「人生案内」である。本稿では、この『読売新聞』『人生案内』を対象として、相談においてどのように解決策が提示されるにいたるのか、その言語編成に注目して考察を行う。同様のデータを用いた先行研究は存在するが、その際注目されてきたのは、人びとが何に悩んでいるのかという、相談者側の言説についてであり、量的な調査により投稿者の属性や悩みの類型化を行うというものであった（加藤 1953；見田 1965；太郎丸 1999；池田 2005；赤川 2006）。そのような先行研究に対して、本稿は、先行研究においては焦点化されていなかった、相談者の問題として語られるものに対して行われる回答に焦点をあて<sup>1)</sup>、それらの回答がどのような言語編成によ

り可能になっているのかというその技術について明らかにするものである。本稿の試みは、紙上「身の上相談」の内容分析を行うのではなく言語編成に注目する点、加えて、相談者ではなく回答者の言語編成に注目する点において先行研究にない新しい視点による「身の上相談」研究として位置づけられる。

とくに、本稿では、専門的な知識——法律、医学的知識など——を用いないで回答を行う実践に着目し、その言語編成を記述する。というのも、そもそも紙上「身の上相談」とは、法律や医学についての相談に見られるように「正しい」と言えるような回答が存在するものではないからである。そこで問われるのは「人生における問題」であり、それらには「正解」はない。紙上「身の上相談」で行われている専門的知識や専門性によらない回答にこそ私たちにとって重要な実践が含まれていると考えられる。私たちは日常生活において、さまざまな問題に直面する。そして、問題解決のためにどうすべきかを考える。そのように悩み考える中で、私たちは、友人、職場の同僚、先輩、後輩など多くの人と相談という行為を行う。そこでは、さまざまな知識や経験が参照されながら相互行為がなされている。とはいえ、そのようなとき、私たちは、専門性に裏打ちされたような特別な実践を行っているだろうか。私たちは、専門的な知識を用いずとも相談という行為を行うし、回答を導き出すこともできる。紙上「身の上相談」には、体面的になされる会話とは異なるけれどもその行為がもつあるいくつかの言語編成が確認できる。後述するが、体面的でないからこそより強く表れていると思われる回答の言語編成すらある。本稿の目的は、そのいくつかの言語編成を取り上げ記述するものである。とくに、専門性によらない言語編成を記述することで、紙上「身の上相談」の回答がどのようにして成り立っているのかを考えていく。

紙上「身の上相談」は、相談者と回答者が1ターンずつしかもたないという特徴のあるコミュニケーションである。相談者から問題提起がなされ、それに回答が与えられる。回答はそのコミュニケーションをその1ターンで終わらせなくてはならないため、いくつかのある特定の言語編成が用いられながら、繊細に行われている。

## 2. 紙上「身の上相談」の歴史

### 2.1 紙上「身の上相談」のはじまり

紙上「身の上相談」の起源は、『女学雑誌』「いへのとも」欄に認められる（池内 1965；矢崎 2008）。この『女学雑誌』「いへのとも」は、1886（明治 19）年 9 月 15 日に始まり同年 11 月 25 日に終了、10 日置きに計 8 回掲載されたのみで短命に終わっている。これは、その当時公に「身の上」というものを語り、それに回答していくということが困難であったことを示していると考えられる。その後、1906（明治 39）年にはじまった『都新聞』「相談の相談」という「身の上相談」欄は長期間にわたり継続的に行われており、これが現在目にするような紙上「身の上相談」の先駆と

---

1) 紙上「身の上相談」においては、問いと回答はひとつのペア（コミュニケーション）になっている。回答は問いでの悩みの語られ方を受けてなされるであるので、問いの語られ方が特定の提案を方向づけているということを考慮しなくてはならないだろう。本稿では、問いの語られ方を扱ってはいないが、そのような構成になっていることを付記しておく。

して位置づけられる。このことに関して、1916（大正6）年の『婦人公論』に、「新聞紙上の一種の副業として、（身の上相談）の一覧を設けたのは、日本の新聞紙上中で、都新聞が最初でありました。今日では読売新聞の婦人欄にも、婦人を主とした身の上相談の一項を見ますが、本家本元は何と云っても都新聞であります」<sup>2)</sup>（『婦人公論』2(8)：趣味1）という記述が残されている。

本稿で分析の対象とする『読売新聞』における「身の上相談」は、現存する紙上「身の上相談」の中でもっとも歴史があるものである。『読売新聞』「身の上相談」は1914年にその取り組みが開始された。初日の記事には以下のように記されている。

（前略）一身上の出来事、たとえば結婚、離婚、家庭のわずらい、及び精神上的の煩悶、婦人の職業問題等につき、男女に関わらずすべて思案にあまることのご相談相手となり、及ぶかぎりの力をいたしたいと存じます（後略）（『読売新聞』1914年4月26日）

この『読売新聞』「身の上相談」は、1937年から49年の間の中断があったが、「人生案内」と名称は変わりながらも現在も同様の内容で掲載されている。現在では、相談に対して回答を行う回答者は、弁護士、精神科医、学者、作家などの専門家や知識人によって担当されている。このような、何らかの専門家あるいは知識人が回答するというスタイルは、「身の上相談」の開始当時からではない。開始当時は、『都新聞』「相談の相談」においても、大正時代の『読売新聞』「身の上相談」においても、新聞記者が回答を行っていた。『女学雑誌』においては、記者だけでなく読者による回答も行われていた。そして、現在と異なるのは、相談内容によっては、相談者が直に新聞社を訪ねて記者に相談にのってもらおうという面談というスタイルも行われていた点である。実際に、『都新聞』において、この面談があまりにさかんになったために、相談に対応する面談があたかも新聞社の一種の「副業」と化しているといふことの以下の記述がある。

少し紛雑した事件になりますと、手紙の往復位では間に合いません。そこで新聞社は一週に二三回の面会日を定め、親しく相談者を引接して、事件の委曲を盡した上で、或は右せよ左せよ、或は南せよ北せよと、解決の方法を授ける様になりました。そして（紙上に掲げて実例にする）と云ふ第一義は何時の間にか客体になってしまひ、「身の上相談に対する解決」と云ふことが、仕事の本体になってしまったのです。（中略）斯うなりますと、「紙上の身の上相談」は一部分でして、その多くは何等の物質的報酬を得られぬ「新聞社の隠れたる慈善事業的副業」と成った観があります。（『婦人公論』2(8)：趣味2-3）

しかしながら、当然、このようなことは現在では行われていない。あくまでも、匿名の相談者に対して、紙上においてのみ回答するのが現在の「身の上相談」である。

『読売新聞』「身の上相談」は、新聞内の「女性付録」に掲載されていたことには留意したい。紙上の「身の上相談」が『女学雑誌』「いへのとも」からはじまったという点からも推察されるよう

---

2) 「 」内の引用は本文のママ。

に、「身の上相談」の担い手になるような人びとは、主に女性たちであったように考えられるのである。「身の上相談」が女性たちにより開拓されてきたという点は重要な論点であるが、本稿の主旨と離れているため今後の課題としたい。女性たちからはじまったとはいえ、女性による投稿ばかりが取り上げられていたわけではなく、『読売新聞』『身の上相談』においても、『都新聞』『相談の相談』においても、男性の投稿者による相談もちろん掲載されている。

## 2.2 紙上「身の上相談」のエンターテインメント化

「身の上相談」が明治時代後期に成立した理由については、そのひとつとして、「マスメディアが掲げる理想と現実とのギャップに悩む大衆への救済策」、『身の上相談』はマスメディアによるアフターケア<sup>3)</sup>であったと考えることができる。新聞雑誌等のマスメディアの普及により、現実と理想のギャップを人びとが体験するようになったが、それらの悩みを相談すべき経験者は身近にいないために、人びとは結局マスメディアにそれらを相談することになった。

先ほど参照した『婦人公論』の記述にあるように、「身の上相談」は紙上で行われ、それが多くの人に読まれるように実例として提示することが「本体」であり、紙上でのやり取りを越えて、面会というかたちで相談に応ずることは「本来の」役割ではない。そういった二義的なものであるはずの活動が、経済的利益も生みず、「本体」をよそに活発に行われている状況は、まさに「慈善事業」なのである。面会することで問題に介入することも、紙上で回答を与えることも、問題解決への取り組みという方向性では同様であるとも言える。しかし、あくまでも紙上の「身の上相談」の第一の役割とは、「相談を解決すること」というよりも、むしろ、参考資料として読んでもらうこと、広く人びとが経験を共有できるように計らうことにある。

現在の「身の上相談」は、そういった役割はあまり強調されなくなっているという指摘もある。現在のものは、「エンターテインメント」、「パフォーマンス」、「娯楽」の要素が強くなり、消費の対象となっており、大衆を喜ばせるためのエンターテインメントに変化したとも言われる（池田2005）。そのように、「紙（誌）上身上相談は、公開された時点で、すでに読み物になってしまう」（一海1990：47）のであり、「新聞や雑誌の身の上相談は実質的な機能を失って、むしろ読み物として（中略）回答者の文章を楽しむという方向へいってしまう」（なだ1990：19）という指摘も十分に理解されうる。

本稿は、こういったマスコミュニケーションを通じて形成される態度を批判しようというわけではない。紙上「身の上相談」は小さな取り組みであるとはいえ、マスメディアで行われている以上、それが悩みを提供する結果になるという「マッチポンプ」的な機能を果たしているということも考慮すべきであるだろう。つまり、マスメディアによって人生や生活に関するさまざまな問題が提起されることにより人びとは悩むこととなり、その救済策として「身の上相談」が行われ、またマスメディアによって回収されるという仕組みがあるということが考えられるのである。この点に関しては、先述したように、マスメディアの登場・発展に伴い紙上「身の上相談」が成立してきたことを考えれば、そういった仕組みがこの紙上「身の上相談」の一面にあることが指摘できるだろ

3) カタログハウス（2003）参照。

う。

とはいえ、紙上「身の上相談」は、人生の参考書的な存在であれ、エンターテインメント的な存在であれ、商業として成り立ちうるほどの読者を獲得しうるジャンルであることには変わりない<sup>4)</sup>。ただ、本稿で論点とするのはもちろん回答における提案の示唆性やエンターテインメント性ではない。本稿の目的は、回答がどのような言語編成により支えられ、その回答が可能になっているのかを記述することである。

### 3. 誰が回答を行うのか

詳細な資料の分析を行う前に、回答という行為を行うものが誰によって担われているのかについて述べておきたい。1954年から2004年までの回答者の人数の推移と、1974年から2004年までの回答者の肩書き（職業）の割合を10年おきに調査した。この調査は、なぜ専門性によらない回答の技法を取り上げるのかを説明するために行った。この調査結果から考えられるのは、相談者の訴える問題に対して、適切な専門的知識を有する専門家が対応するようになったために、回答者の数が増加したという単純な図式ではなく、回答は専門的知識を必ずしも要しないある特定の言語編成によって行われている場合が多いのではないか、ということである。

『読売新聞』『人生案内』は、年間300件ほど掲載される。図1にあるように、回答者の人数は増加してきている。1954年には5名だったのが、徐々に増加して2004年の時点では10名にのぼっている。これはのちに参照する図2からわかるように、回答者の肩書き（職業）が多様化したことと関連していると考えられる。「人生案内」はほぼ毎日掲載されるものであり、それを5名で担当するというのは大変な負担であると考えられる。そういった状況から、人数が増加した理由として、回答者ひとりあたりの負担を軽減するため、あるいはもっと肯定的に考えるならば、より丁寧で推敲された回答を掲載するためということも考えられる。

このように、回答者の人数が増加していく中、その回答者の肩書き（職業）も多様化していく。そもそも、回答者の肩書き（職業）の表記が開始されたのは1972年であり、それまでは回答者の

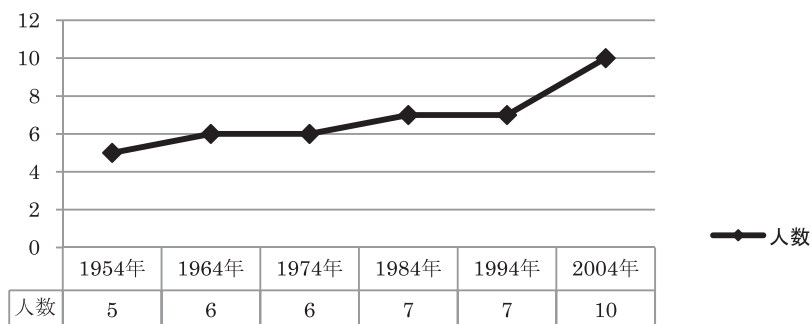


図1 回答者人数の推移

- 4) 紙上「身の上相談」は、それが行われる媒体により相談内容や回答内容に差異がある。新聞紙上で行われる場合は、エンターテインメント性よりも問題の社会性がうかがえるものが多い。雑誌で行われる場合は、新聞の場合よりエンターテインメント性を重視しているように思われる。

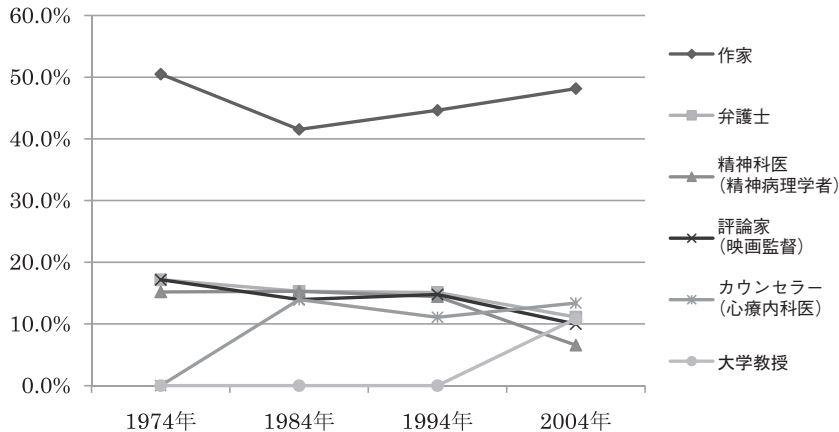


図2 回答者肩書き別割合の推移

情報に関しては個人名のみであった。これは、相談の回答を誰が行っているのか、そしてそれはどのような職業の人であり、どのような専門性のもとに語られているのか、という点が重要視されるようになったということを示しているのではないだろうか。1972年での回答者の肩書き（職業）は、作家、精神病理学者、随筆家、評論家、弁護士の5種であった。回答者の肩書き（職業）の表記が開始されてからのち、その職種は、1974年は4種、1984年は5種、1994年は5種、2004年は6種となっている。少しずつではあるが、増加傾向にあると考えてよいだろう。素直にこの状況を解釈するとすれば、寄せられる相談の内容の多様化、そして、それに対応するための専門家の配置と捉えることもできる。しかしながら、図2の年間の全相談における回答者の肩書き（職業）別の割合からは、回答のほぼ半数が「作家」と称される人びとによってなされていることがわかる。つまり、ある特定の知識をもった専門家がその専門的知識を用いて回答を与えるという行為は頻繁には行われていないのである。相談内容を概観すると、離婚問題や財産に関する問題に対して、弁護士という肩書き（職業）の回答者が、専門的な知識でもって回答を行っているものもある。しかしながら、そのような回答は決して多数であるとは言えず、また、精神科医やカウンセラーといった肩書き（職業）の回答者における回答も、専門的知識に裏打ちされた回答として捉えられない実践を行っている。もっと詳しく言うとするれば、回答には、肩書き（職業）による差異があるというよりも、むしろ、肩書き（職業）によらないあるいくつかの共通の回答の言語編成が確認されるのである。

#### 4. 分析

本稿の分析は、ディスコース分析（Potter & Wetherell 1987；鈴木 2007）によるものである。ディスコース分析では、テキストは単なる媒介としてではなく、テキスト自体がある特定の現実を作り上げながら何らかの実践を行うものとして捉えられる。この分析のスタイルをとるのは、はじめに述べた本稿の最終的な目的、つまり、「身の上相談」の回答の言語編成を明らかにするという問いに対する回答を得るためにもっとも適切であると考えられるからである。

本稿は、言語編成に着目する質的な分析のスタイルをとる。ただし、本稿は質的な分析を行うものであるけれども、言語的にどのような技術が用いられているのかという方法を問うものであり、内容分析を行うものではない。なぜ本稿においては、相談者の訴える問題内容についてではなく、その回答に着目するのかというと、相談者の訴えである「身の上相談」の問いの部分は、字数の制限などがあり、かなりの場合、新聞社側で編集が行われているという点を考慮したためである。もちろん、回答の方が全く編集されていないかということ、それも否定できないが、実際の投書よりも編集の度合いは低いと考えられる。編集の度合いを分析する際の問題のひとつとして考えるのは、本稿のように言語編成を記述する場合、編集という作業はある特定の形式に沿うように行われるものであるため、編成を明らかにしようとするとはほとんどの相談内容が同様の形式であると指摘せざるを得なくなるからである。相談内容は特定の形式にのっとって掲載されており、その編成を明らかにするとすれば、その特定の形式という1点に対する指摘しかできなくなると考えられる。また、相談内容の分析を行わないのも、相談で訴えられる問題というものは時代時代において変遷があると思われるけれども、「身の上相談」の約100年の歴史の中で内容自体には大きな変化があるとは言い難いと思われるからである。「夫婦」、「親子」、「愛」、「性」、「仕事」、「生活」というような「身の上相談」の主題は、「身の上相談」の開始から語られ続けていることであり、内容自体の変化は期待するほどには見られない。そこで、内容の変化を論じる限界を超えるべく、本稿では、新たな視点として回答の言語編成の分析を採用するのである。

#### 4.1 回答の分析

##### 4.1.1 相談における問題化

紙上「身の上相談」においては、まず相談者によって悩みが語られたのち回答が与えられる。回答においては、相談者の悩み語りの中から「いったい何が問題なのか」が再度確認され確定される。この過程を「問題化」と呼ぶことにする。

この問題化のひとつの方法として、相談で語られた問題を新たに解釈し直したり隠された真の問題を考えたりするのではなく、単純に繰り返すというものをあげることができる。【データ1】は、ひきこもりの義弟の面倒を見るくらいなら、夫と離婚することを考えるという相談である。

【データ1】〈33歳の義弟が引きこもり 将来が不安 夫との離婚も検討〉

回答担当：立松和平（作家）

問い：01 三十六歳の主婦です。引きこもりをしている夫の弟のことで相談します。

02 三十三歳になる義弟は真っ暗な部屋に引きこもって三年ほどになります。

03 （中略）私はそのような義弟を背負い込むつもりはなく、近い将来、夫と

04 離婚すること考えています。どのように解決したらいいでしょうか。

回答：05 三十三歳にもなった引きこもりの義弟のことで、あなたは将来が不安にな

06 り、夫との離婚も考えているということですね。お手紙を一読して不思議

07 に思ったのは、引きこもりの義弟の実兄、すなわちあなたの夫のことがま

08 ったく見えてこないことです。まわりのすべての人が苦しんでいるのに、

- 09 あなたの夫はどのように考えているのでしょうか。この中で、精神的に一  
10 番苦しんでいるのは、引きこもりの当人です。(中略) 今あなたのすべき  
11 ことは、彼らの苦しみを客観的に見つめ、思いやることではありませんか。  
12 両親がいなくなった後に、引きこもりの義弟の犠牲になるのはいやだから、  
13 今のうちに離婚してしまうというのは、短絡的ではないでしょうか。(後  
14 略)(行番号は筆者による)

問題の繰り返しが行われているのは、05-06行目である。とくに06行目の「ということですね」という表現に端的に表れている。この【データ1】の場合、問題をこの「将来が不安になり、夫との離婚も考えている」という一点に絞りこむことで、12-13行目の「今のうちに離婚してしまうというのは、短絡的ではないか」という相談者に対する批判が可能になっている。

次の【データ2】は、問題の繰り返しに加え、その背景にある問題にまで焦点を当てるという方法が行われている事例である。ここでは、夢であった教員の採用試験に合格することができず、気持ちの切り替えができないという問題が語られている。それに対して回答では、自分の将来についてもう一度考え直すことが提案されている。

【データ2】〈教員試験に失敗、落ち込む…合格した友人、嫌いになりそう…〉

回答担当：大森一樹(映画監督)

問い：01 二十二歳の大学四年生。教員採用試験の二次試験で不合格になってしまい、  
02 とても落ち込んでいます。(後略)

回答：03 趣味や熱中するものがなく、教員採用試験に合格するためだけにがんばって  
04 きたと書かれていますが、目的は、教師になることではなく、試験の合格だ  
05 ったのでしょうか。ちょっと意地悪な言い方になったのは、これを読む限り  
06 私にはあなたの落ち込んでいる理由が、教師になれなかったことではなく、  
07 試験に落ちたからのように思えるからです。いまさらこんなことをと思いつ  
08 つも、やはり言うておかなくてはというのは、教師という仕事は特別なもの  
09 だということです。一般企業の就職試験に落ちたのと少し違うのではと思う  
10 のです。合格した友人に嫉妬(しつと)をおぼえる自分の心の狭さに教師  
11 の資質を問う前に、何故(なぜ)自分が教師になりたいのか、何を教え育  
12 てたいのか表明する必要があると思います。その答えが出せるなら、また  
13 挑戦しようという力はおのずと湧(わ)いてくると信じます。もしそれが  
14 出ないのであれば、自分の将来や進路についてもう一度考えた方がいいか  
15 もしれません。(行番号は筆者による)

【データ2】の03-05行目では、相談者の状況が繰り返し述べられながら「目的」の確認が行われている。そして、相談者が落ち込んでいる状況の根本は、「友人に対する気持ち」や「教師としての資質」というよりもむしろ、目標を見誤って(見失って)いることだと指摘されている。つま



り、そもその問題は「教師になること」を志向せず「試験に合格すること」に志向した結果であるとされているのである。それを受けて、13-15 行目で「自分の将来について考え直す」という提案が可能になっている。【データ 2】では、03-07 行目にこの問題化が行われている。回答の半分以上がこの問題化の過程で占められている。このことは、問題化の過程の重要性を示している。解決案の提案が説得的に行われるためには、この問題化が適切に行われる必要があると考えられる。

#### 4.1.2 問題を肯定すること

相談において提示された問題に対して、回答は、その問題に同意することからはじまる場合がある。【データ 3】では、実家の母との軋轢・関係性にこれ以上耐えられないということが主張されている。それに対する回答では、母へ気持ちをじっくり伝えていくということが最終的には提案されている。

【データ 3】〈募る望郷の念、母への思い〉

回答担当：野村総一郎（精神科医）

問い：01 60 代女性。最近、望郷の念が強くなりました。ただ、実家にいる母との関  
02 係を考えると、今の自分の気持ちが不思議に思えます。90 代の母は、弟  
03 夫婦と暮しています。母は昔から、弟を長男として大事に育てる一方、私  
04 には言葉の暴力を浴びせ、体にも痛い思いを負わせました。父も母の言い  
05 なりで、両親に愛されたと思えることはなく、孤独な子ども時代でした。  
06 （後略）

回答：07 望郷の念、切々と伝わるお手紙です。そしてそのお気持ちはお母様への思い  
08 と一体化しているようです。お母様から虐待に近い仕打ちを受け続けても、  
09 あなたは愛を求めてやまない。まるで「お母さん！どうしてやさしくしてく  
10 れないの！」と泣きながら必死で追いつがる小さな女の子のように……。こ  
11 の状況には涙せざるをえませんでした。（後略）（行番号は筆者による）

【データ 3】は、相談者の訴える問題に対する肯定の過程が長い事例である。07-11 行目で「涙せざるをえませんでした」という言葉に表れているように、相談者が提示する問題に対する過剰とも言えるような共感に関する記述が見られる。問題に対する強い共感的態度を示す記述は、回答者が相談者の提示する問題を理解しているという「主張」であると同時に「立証」でなくてはならないという制約と関係していると思われる。特に、紙上の「身の上相談」においては、対面状況ではないため、相談者が問題について「回答者は理解している」ということを理解したかが観察不能であるので、このような記述が表れやすいと言える。「主張」と「立証」の違いについて、串田（2001）は、「話し手の発話を聞いて『なるほどー』などというとき、聞き手は理解を『主張』しているが、『立証』してはいない。『主張』は『立証』よりも曖昧なことである。なぜなら、人は理解していなくても『なるほど』ということが出来るからだ」（串田 2001：40）と述べている。これは対面状況（会話）における考察であるが、同じことが「身の上相談」にも言える。紙上「身の上相

談」においては、「なるほど」と言うことすら出来ない。そのため、回答では、問題を「理解している」ということを対面状況の場合より、より強力な方法で示さなくてはならない。この【データ3】の07-11行目のような記述は、相談に対する理解を示すための「立証」の過程であり、冗長ともとれるようなものとなっているのである<sup>5)</sup>。

#### 4.1.3 回答者が登場すること——「私」を主語に用いる記述

回答の中に、回答者自身——「私」——が登場するものがある。「私はこう思う」「私はこうだった」「私ならこうする」という「私」を主語とした記述は、その時点では、何かしらの提案を行う回答者カテゴリーではなく相談者と同じカテゴリーを実践しているように見える。しかしながら、このような記述方法も回答に現れる特徴的な実践のひとつである。この特徴的な実践は、回答の説得性に関わる重要な問題を含んでいる。

【データ4】では、自分の性格と職場に関する悩みが語られており、それに対して、友人に相談することや病院に行くことが提案されている。

【データ4】〈会社に行くのがつらい 暗い性格、職場になじめぬ19歳OL〉

回答担当：三枝佐枝子（評論家）

問い：01 十九歳のOLですが、自分の性格に悩んでご相談します。小さいころから  
02 となしい方でしたが、友達は大勢いて楽しくやっていました。それが中二の  
03 ときクラスで仲間はずれにされてから、おかしくなっていました。まず、  
04 男子と口をきかなくなり、そのうち女子ともぎこちなくなって、高校を卒業  
05 することには暗い性格になってしまいました。就職してから、道ですれ違  
06 った人がヒソヒソ話していると、自分のことを言われたような気がしたり、  
07 その上、泣き虫でちょっと悲しいだけで涙がポロポロ出てきてしまいます。  
08 （後略）

回答：09 実は私自身も先ごろ、ちょっとしたノイローゼ気味になった経験があり、そ  
10 のときは、あなたのお手紙の気分にやや似た経験をしましたので、お気持ち  
11 はよくわかる気がします。（中略）とにかく、消極戦術をやめ、努めて積極戦  
12 術に出て、自分の悩みを自分で克服するより道はありません。私もそうして  
13 乗り越えたのです。（行番号は筆者による）

【データ4】の09-11行目では、「私自身」も相談者と同じ経験があり相談者の「気持ちがよくわかる」と述べられている。さらに、その記述は「実は」という語を用いて、打ち明け話のような体裁がとられている。これは、相談で提示される問題に対して、他の誰かはどのような判断を行うかわからないけれども、少なくとも「私」だけは理解している<sup>6)</sup>という表明になっている。回答に

5) 「立証」という行為は非常に難しいことがここから推察される。むしろ不可能なのかもしれない。だからこそ、「立証」過程はこのように長くなるとも考えられる。

6) このような態度は、「傾聴」活動で言われる「共感的態度」に類似している。前田（2003）は「傾聴」活動の相互行為論的分析を行っている。

「私」が挿入されることで、その回答が真摯に行われているという態度すら表されている。さらに、この回答者自身である「私」の登場が行われる場所についても注目したい。「私」が登場するのは、回答の序盤（あたま）である。相談者が語る問題に対して理解をしていることを冒頭で表明することで、何よりも先に理解（共感）があることが示され、たんなる「主張」ではなく「立証」となるのである。

次の【データ 5】では、パチンコにこってしまった高校生が退学になりたくないという問題を提示している。それに対して、希望を持つこと、よい友・よい娯楽をもつことが提案されている。

【データ 5】〈退学がこわい パチンコ覚えた高校生〉

回答担当：山室民子<sup>7)</sup>

問い：01 十六歳、高校二年の少年、昼間は家業を手伝っていますが、パチンコにこ  
02 ってしまいました。家の金をだまって持出し、多いときは三千円もすりま  
03 したが、わからぬのを幸い毎日続けています。（後略）

回答：04 いま思い切って方向転換をなさらねばなりません。パチンコは断然おやめ  
05 なさい。映画も見合わせなさい。家族が気づかないからとて、お金を持出す  
06 のは不賛成です。私があなたであつたら、私は自分のしたことを家族にも、  
07 神にも、告白もし、謝罪して、再び同じことをくり返さないようにします。  
08 小遣をきめ、毎日定額を正々堂々と受け、予算を立て、小遣帳に記入しなが  
09 ら、正しく用いる努力をします。（後略）（行番号は筆者による）

【データ 5】の 06 行目では、「私があなたであつたら」と仮定法が用いられている。学生としての理想的な生活が、規範や通念などの観点からではなく、回答者個人の考えとして提示されている。規範や通念などの観点から回答し、「みんなならこうだ」や「誰でもこうする」というふうに、世間に準拠したかたちで語ることが可能である。にもかかわらず、ここでは「私」という主語が用いられている。それは、回答において、主語が「みんな」や「誰でも」であると一般性が生じる一方、緊密さが希薄になってしまうからである。「私」という主語を使用して回答を行うことは、緊密性の生成に関わる技術である。

次に見る【データ 6】は、この「私」がより強いかたちで現れているものである。【データ 6】では、夫の暴力と夜の生活についての悲痛な悩みが打ち明けられている。それに対して、06-12 行目では、回答において回答者自身が感じたとされる相談者の夫への怒りが記述されている。それと同時に、相談者にも非があるのではないかと指摘しつつ、家族で対応することが提案されている。

【データ 6】〈つらい夜のつとめ 仕事ぎらいの夫が毎晩要求〉

回答担当：小山いと子（作家）

問い：01 （前略）夫は若いころからのわがままで、仕事ぎらいの上、やきもちが強く、

7) 1954 年の段階では、回答者の肩書き（職業）の記述はないためここでも記載しない。山室民子は、社会事業家で労働省婦人少年問題審議会委員を務めていた経歴を持つ（『近現代日本女性人名事典』）。

02 何かにつけて私をぶちはたき、私の耳は遠くなってしまいました。その上、  
03 過労から腰痛になり、コルセットをつけて働いているのですが、夫はろくに  
04 働かないせいか体力が余り、昔から現在も毎日夫婦生活を求め、断ると「男  
05 がいるんだろう」となぐり散らすのです。(後略)

回答：06 一番つらいのは大家族の農家の嫁だと昔からいわれていましたが、今なお、  
07 しかも東京に近いところですらこんな状態とは！読めば読むほどカッカして  
08 来て、あなたの平安を得るためには、そんなやくざな亭主は家裁へでも本裁  
09 判所へでも訴え出て、財産を二等分して一生困らないだけのものをとって離  
10 婚する。あなたはすぐ入院して腰や耳や痛いところを全部治し、温泉へ行っ  
11 てのんびり暮らすこと、などと実は回答者にあるまじき答えさえ浮かんだの  
12 ですが、いや待てしばしと一晚考えて次の結論に達しました。(中略) 奴隷で  
13 も娼婦(しょうふ)でもないあなたが「夜のつとめ」などといわれると、涙  
14 が出ます。幸い息子さん夫婦は良識あるよい人たちのようですから、照れず  
15 に一切を打ち明けて協力しておもらい下さい。暴力をふるったら、息子さん  
16 の部屋に逃げこむか、すぐ来てもらうというふうに。長い習慣を変えるのは  
17 急にはむずかしいが、必ず効果はあると存じます。(行番号は筆者による)

「回答者にあるまじき答えさえ浮かんだ」という言葉でもって語られる、このような感情的な語りは、回答者自身である「私」が強く表れている事例である。感情的に語るとは、相談に対する共感的態度を表していると考えられる。これは、先述した【データ4】での「気持ちがよくわかる」という表現と同じ機能を果たしている。機能的には等価であるけれども、感情的な語りは、直接的に「わかる」と表現するよりもより強い共感を表す方法であると言える。

#### 4.2 問題と提案の整合性

最終的に提案される解決策は、提案という行為が行われていればその内容自体はどのようであっても成り立ちうる。例えば、これまで見てきたように「考え直す」「がんばる」といったような抽象的で型にはまったような提案であっても、そこに至るまでの過程が論理的に展開されていけば、「正しさ」をもった提案として解釈されうる。これまで見てきたデータでは、提案に至るまでの論理的展開上の矛盾を指摘できるものはなかった。

そこで、最後に【データ7】を取り上げたい。この【データ7】は、相談者の訴える問題と回答における提案が食い違っている事例である。相談者によって「毎日学校や仕事に行くことができない」と問題が述べられているにもかかわらず、回答では「まずは毎日仕事に行けるようになること」が提案されている。そして、それが出来るようになれば日常生活がステップアップしていけると述べられている。しかしながら、そもそもの訴えられていた問題は「毎日特定の場所に通うということが難しい」状況をどうにかしたいということであり、その問題と「まずは毎日仕事に行けるようになること」という提案は符合しない。

【データ 7】〈仕事や学校 毎日通えない〉

回答担当：山田昌弘（大学教授）

問い：01 19歳、アルバイトの女性。中学1年の時に不登校になってから、毎日学校や  
02 仕事に行くということが私にはできません。（中略）以前から、何事も人と  
03 比べては、自分が劣っている部分ばかりが見つかり、落ち込んでしまうこ  
04 とがあります。「人は人、自分は自分」と考えられるのは、充実した毎日  
05 を送れている人だけだと思います。（中略）今の自分を受け入れ、もっと  
06 強くたくましくするにはどうしたらいいでしょうか。

回答：07 （前略）あなたが劣等感を抱く相手だって、欠点はあるのです。むしろ、  
08 自分の足りない点を理解しているあなたは、将来の伸びが期待できると思  
09 います。あなたはまだ若いのですから、自分らしい生き方を考えるのはも  
10 う少し先でいいのでは。他人と比べそうになったら、まず自分のすべきこ  
11 とを考える。他人の目など気にならないくらい、目の前のことに一生懸命  
12 取り組んでみてはどうでしょうか。自分のできないことではなく、できてい  
13 ることに目をむけてみては。まずは毎日仕事に行けるようになること、それ  
14 ができるようになれば、次は資格の勉強、試験とひとつずつクリアしていけ  
15 ば、自然と自信がついてくるはずです。あなたには応援してくれるご家族が  
16 いるのですから大丈夫です。このまま頑張ってください。（行番号は筆者に  
17 よる）

05-06 行目の「今の自分を受け入れ、もっと強くたくましくするにはどうしたらいいでしょうか」という最終的な問いかけには「このまま頑張ってください」という提案で矛盾はない。しかしながら、問いで問題のひとつとして主張された 01-02 行目の相談者の現状に関する問題化が回答の中で行われていないにもかかわらず、その部分が、最終的な提案を補完するための提案の一部として採用されているために、問題と提案の間にねじれが生じていると思われる。つまり、回答において問題化していない点に触れるような提案が行われると、問題と提案の間の整合性を保つことが難しくなるのである。

## 5. 考察

問題化が適切に行われることにより、説得的な提案が可能になっていることは 4. 1. 1 で指摘したとおりである。問題化はたんなる相談内容の確認行為ではなく、その後に続く提案に論理的正しさを与える機能をもつ。提案は、論理的に導かれた結果でなくてはならない。「こうするべきである」「こうした方がよい」という提案は、それ自体単独では成立せず、「こうだからこうするべきである」という原因が必要であり、その原因を明確にするのが問題化の機能である。問題化と提案はひとつのペアであり、問題化が適切に行われないと提案の正当性に疑問が生じてしまう。問題化が行われない相談はほとんどない。それは、どのような相談であれ、最終的には何かしらの解決策の

提案を行う必要があるからであり、提案するということが必要である以上、問題化の過程を経なければならないからである。つまり、先ほど述べたように「こうだからこうするべきである」という論理展開でなければならないのである。問題化が適切に行われることにより、回答で提示される解決案の正当性が保証される。

【データ4】、【データ5】、【データ6】は、回答に「私」が登場するものであった。これらは記述のスタイルは異なるが言語的には同じ機能を果たしている。それは、経験の共有あるいは共感を基礎として回答に説得性を持たせ、共同性を形成しているということである。ここでの説得性とは、あるものが「正しい」となされる場合に、たくさんある正しさの中でもそれがよいとされることを指す。回答における回答者自身である「私」の登場により、相談者によって語られる悩みは、相談者ただひとりのユニークな経験から相談者と回答者相互に共通の経験として表れる。それは、単独性が主張されていたものが複数性を得たものに変わるということを意味する。単独から複数に変わることによって、道徳的・規範的に同じであるある特定の価値基準を共有する緊密な共同性が形成される<sup>8)</sup>。その共同性は、4.1.2、4.1.3で見たように、回答における相談内容に対する理解が、「主張」ではなく「立証」されることによって成り立っている。「立証」過程である「私の登場」は、たんなる強い賛同（同調）なのではなく共同性を生成する重要な過程なのである。共同性が生成されることにより、その後に続く提案が道徳的な「正しさ」を運び説得性を得るのである。また、回答者自身である「私」が登場することにより共同性が生まれ、回答に道徳的正当性が付帯され説得性が生まれている。これらのことからわかるように、相談における回答は、それそもその道徳的正しさが問題なのではなく、正しいと見えるように語られているために説得的なのである。

また、問題の肯定は問題化と同時に行われうる。相談者の語る問題を問題として認めるということは、問題を特定していることと同義であるからである。これまで、問題化と問題の肯定を別々に分析してきたが、このように考えると、問題の肯定という作業は問題化のひとつのパターンとして捉えられるだろう。さらに、問題の肯定は、その肯定の過程自体に回答者自身である「私」が登場する場合もある。「私もそうでした」という語りに代表されるように、回答者により自身の経験が共感的に語られること自体に、そこで語られている問題への肯定が含まれていると考えられるからである。

提案を可能にしている技術は、①問題化、②問題の肯定、③「私」の登場、であった。3でも触れたように、とくに、問題化の過程と回答者自身である「私」が登場するという2つは、提案の正当性と説得性に関わる重要な技術である。

ここで注意しておきたいのが、これまでに記述した3つの言語編成の3つともすべてがそろわなければ、回答として成立しないというわけではない、ということである。また、これまで見てきたように、これらの3つはあくまでも専門的知識を用いなく行われる回答実践に現れた特徴的な言語編成の一部なのであり、今回取り上げた言語編成がすべての「身の上相談」の回答に当てはまるというものでもない。これら3つの言語編成は、ある意味で「当然のこと」あるいは「それはそうだ」と思われるかもしれない。しかしながら、「当然だ」と思われることに重要性があると考えら

8) より少数のほうが緊密であると考えられる。

れる。なぜなら、この紙上「身の上相談」における回答という行為のその言語編成にこそ問題の解決のための道筋が描かれていたからである。

## 6. 結論

1984年から約20年間回答者をつとめてきた作家の落合恵子は、回答を行う際留意していた点について以下のように述べている。

「あなたは本当はどうしたいの？」と、もう一度そのひとに問い返すこと。そして、「答えを出せるのは、あなたしかいない。だってあなたの人生なのだから」という、当然すぎるほど当然なことを、突き放すのではなく、事実として繰り返すことで、(中略)少々のお手伝いをする(落合 2002)

この言葉のとおり「身の上相談」で語られる問題に対する「答え」を出せるのは本人しかいないかもしれない。しかしながら、回答の言語編成を追ってきてわかったように、そもそもの「問題」というものですら、ある特定の言語編成により語られた物事の一側面であると考えべきではないだろうか。そう考えられるのは、回答が繊細な言語的实践を含んでいたのは、その発端である問いかけの部分にそのようにして回答を編成させる要素が内包されているからである。「正解がない」からこそ問題はさまざまに解釈可能な文脈で語られる。それらを受けとめ、問題化を行い、そこから論を展開することができれば、その問題に対する回答を与えうる。つまり、最終的な解決策やその提案自体に悩みという問題に対するなんらかの効力があるというよりも、むしろ、回答の言語編成そのものにこそ問題を解く鍵があるのである。

相談の回答における提案を支えているものは、私たちでも実践可能な言語的技術である。豊富な経験や専門的な知識といった特別なものは必ずしも必要ではない<sup>9)</sup>。もちろん、法律や医療に関する問題に代表されるような相談行為では、専門的知識は必要であるだろう。しかしながら、本稿ではあえて専門的知識によらない回答の方法について考えてきた。それは、そもそも「身の上相談」それ自体が主題とする「人生における問題」のように「正しい」回答と言えるようなものがないものを分析・考察することを通じて考える方が、正解が存在するような問題について考えるより、この紙上「身の上相談」の回答の言語編成の特徴が浮き彫りになると考えられるからである。本稿で見てきたように、そのような正解と言えるものがないような問題について回答をするという行為は、その正当性と説得性に関して繊細な作業を伴う言語的实践を必要とする。それは、「正しさ」というものが如何に不安定なものであるのかを示している。紙上「身の上相談」の回答は、特定の技術を用いてそのような不安定性をできるかぎり縮減することにより可能になっていると言えるだろう。

---

9) 中村・樫田(2004)は、電話相談における相談の相互行為論的分析を行い、医学的知識や同調的行為があるだけでは、適切な助言が行えない場合があることを指摘している。正しい知識や同調的な態度をまさに適切なものとし、助言を有効とする相互行為のあり方が問題であると述べられている。

## 謝辞

本稿は、関西学院大学先端社会研究所 2012 年度リサーチコンペの研究助成を受けて実施した調査成果の一部である。

## 参考文献

- 赤川学, 2006, 「日本の身下相談・序説——近代日本における『性』の変容と隠蔽」『社会科学研究』57(3・4): 81-95.
- 中央公論社, 1917, 「新聞社へ身の上相談に行く女——婦人生活の裏面に潜む驚異すべき事実」『婦人公論』2(8).
- 池内一, 1953, 「身上相談のジャンル——新聞・雑誌の歴史から」『芽』9・10: 8-13.
- 池田知加, 2005, 『人生相談「ニッポン人の悩み」——幸せはどこにある?』光文社.
- 一海真紀, 1990, 「読みものとしての身上相談」『思想の科学』5(128): 47-9.
- カタログハウス編, 2003, 『大正時代の身の上相談』筑摩書房.
- 加藤秀俊, 1953, 「身上相談の内容分析」『芽』9・10: 17-29.
- 近現代日本女性人名事典編集委員会, 2001, 『近現代日本女性人名事典』ドメス出版.
- 串田秀也, 2001, 「私は－私は連鎖——経験の『分かちあい』と共－成員性の可視化——」『社会学評論』52(2): 214-231.
- 前田泰樹, 2003, 「『傾聴』活動の論理文法について」『保健医療社会学論集』14(1): 13-26.
- 見田宗介, 1965, 「現代における不幸の諸類型——〈日常性〉の底にあるもの」『現代日本の精神構造』弘文堂.
- なだいなだ, 1990, 「当世『身の上相談事情』」『思想の科学』5(128): 17-23.
- 中村和生・樫田美雄, 2004, 「〈助言者－相談者〉という装置」『社会学評論』55(2): 80-97.
- 落合恵子, 2002, 『人生案内——自分を育てる悩み方』岩波書店.
- Potter, J., Wetherell, M., 1987, *Discourse and social psychology: Beyond attitudes and behavior*, London.
- 鈴木聡志, 2007, 『会話分析・ディスコース分析——ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社.
- 太郎丸博, 1999, 「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」『変わる社会・変わる生き方』ナカニシヤ出版.
- 矢崎千華, 2008, 「『身の上』を語ることとその成熟——明治時代から大正時代にかけての『身の上相談』に関する考察」熊本大学大学院文学研究科 2007 年度修士学位論文.

## 資料

- 読売新聞 1954. 11. 07 (【データ 5】)
- 読売新聞 1974. 01. 18 (【データ 6】)
- 読売新聞 1984. 02. 10 (【データ 4】)
- 読売新聞 2004. 01. 19 (【データ 2】)
- 読売新聞 2004. 02. 01 (【データ 1】)
- 読売新聞 2012. 05. 01 (【データ 3】)
- 読売新聞 2012. 05. 06 (【データ 7】)



The Formation of Advices in the ‘Personal-advice column’ :  
Discourse Analysis of Advices not Based on the Professional Knowledge

YAZAKI, Chika  
(Kwansei Gakuin University)

**Abstract**

Based on the discourse analysis of the text, this paper attempts to clarify the formation of advices in the ‘personal-advice column’. The origin of the ‘personal-advice column’ was established in the late Meiji era. In the late Meiji era, the ‘personal-advice column’ was generally dealt by the newspaper reporters. In contrast, persons in charge of advices today are professionals, for example, writers, lawyers, psychiatrists, and so forth. About 300 articles are published each year, and almost half of the advices in these articles are dealt by writers. Therefore, this paper assumes that there are some particular discourse patterns in the formation of advices created by the writers of which are not based on the professional knowledge, and categorized them into the following three patterns. Firstly, this paper focuses on their discourse to reconfirm the issues posted by contributors. Secondly, this paper looks at the process of how the writers affirm the issues. Thirdly, it focuses on the process of how the writers themselves appear as “I” in the advices. Through these devices, the discourse of advices is formed by sharing the process of creating the sense of cooperation among the writers and contributors as well as legitimates the logical righteousness of the proposed ideas by writers.

**Key words:** ‘personal-advice column’, advices, proposal, the formation of advices